

■2013年1月2日（水）新年初日・トークイベント無事開催しました！

※トーク：藤山直樹さん（精神分析家・上智大学教授）×三浦淳子監督

2013年・初の劇場上映。新年のお忙しいなか、たくさんの方にご来場いただきました！
上映後の劇場トークは、日本では30人程しかいない精神分析家のひとり、藤山直樹さん！



精神的な苦しみを抱える人々の心に向き合ってお話を聞き、ともに時間を過ごすということをされている藤山さん。三浦淳子監督が学生時代やっていた演劇の主宰者で演出家であったということから当時の思い出も交え、演出家としての表現のあり方、演劇表現者であった三浦監督の映画「さなぎ」での表現方法の面白さ、登場人物・愛ちゃんのご家族やお友だちの存在、映画の中で語られる「愛ちゃんの見つめた夢」について…など、お話しいただきました。

また、三浦監督のメソメソ少女時代のお話と同調し、ご自身の「視力が悪く、ボヤ〜とした世界に生きていたことや跳び箱が飛べずに恥ずかしい思いを抱いていた少年時代」についても、笑いを交え語っていただきました！本作の編集方法については、三浦監督が14年間撮りためた記録のなかで「思い切って省略した部分があり、また映画として楽しめる編集を心掛けた」という監督の意図を聞き、「<不登校の子がいました→成長しました→良かったですね>で終わらない作品になっている。さすが！」と唸ったそうです。



■藤山直樹さん

演出家は役者が日常生活では表さない「こんな奴だったのか?!」という瞬間がほしい。それは演出しているうちに出てくるもので、その瞬間こちらの期待を超えていく。「さなぎ」は監督が余計なことを一切していない「スゴイ映画」。普通は面白くしたいので色々仕掛けたりするが、カメラをじっと置いておくだけで質問も少ない。それはとても勇気がいることだが結果すごく面白いことになっている。二回三回と…何回見ても面白い。それはファクト（事実）だから。

■三浦淳子監督

映像を始めたのは演劇時代から数年後の29歳のときからだが、やはりそこから繋がっているのは「何がおこるか分からないものの方が好き」ということ。劇映画は基本的に、台本を書き、役者さんに体現してもらうのだけど、ドキュメンタリーは何が起こるか分からない。一回性の偶然に起きることの面白さがドキュメンタリーの命だと思っている。

「こう撮るぞ」といくと面白いものが捨てられていってしまう感じがする。空気のように息をひそめてじっと「みつめる」ことで、起こる面白いことが大切と思う。



笑いの絶えなかった劇場トーク後には、監督がロビーでお見送り。サインを求められたり、お話をしたり、、、その後1Fのカフェ THEOにてお客さまと交流会。新年特別プチビュッフェ形式でワインや甘酒、珈琲、おしるこ…で新年を祝い乾杯しました！
～ご来場いただいたみなさま、ありがとうございました～